

氏名	増田 裕子
学位の種類	博士（社会福祉学）
学位記番号	甲第 85 号
学位記授与の日付	2023 年 9 月 28 日
学位授与の要件	学位規程第 3 条第 4 項該当
学位論文題目	育児と介護のダブルケア期に働く女性への仮説的支援モデルに関する研究 —ワーク・ファミリー・コンフリクトとストレスの視点から—
論文審査委員	審査委員長 田村 真広 審査委員 木村 容子 審査委員 壬生 尚美 学外審査委員 金子 恵美 学外審査委員 藤岡 孝志

# 育児と介護のダブルケア期に働く女性への仮説的支援モデルに関する研究

## - ワーク・ファミリー・コンフリクトとストレングスの視点から -

Research on a Hypothetical Support Model for Working Women during  
The Sandwich Generation of Child Care and Nursing Care  
- From the perspective of Work-Family Conflict and Strength -

増田裕子  
Yuko Masuda

### ▼日本語抄録

本研究の目的は、子育てと介護が相互に影響しあう、育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルを探索的に検討することである。仕事・育児・介護の困難な面だけではなく、経験を通して得たもの・良かったことにも焦点を当てた。調査1では、仕事とダブルケアの並立状態をどのように捉え、どのような葛藤を経験し、どのような相互作用が働いてストレングスを獲得してきたかを明らかにするために、ダブルケア期に働いた経験を持つ女性に半構造化面接を実施し、質的分析とTEMを援用したプロセス分析をした。調査2では、先駆的なダブルケア支援を行う自治体での支援体制・内容を明らかにするために、自治体職員を対象に半構造化面接を実施し、質的分析を行った。調査1・調査2より、仕事・育児・介護の状況に応じて何が起こり、どのような問題が生じ、それに対してどのような対処をしたのか、うまく対処できたのか/できなかったのか等のメカニズムが明らかになった。それは、仕事+ダブルケアが始まる前と、仕事+ダブルケア中、生活が落ち着いた後という時期により、状況が異なることも明らかになった。これらの知見を反映し、「予防的な観点からの仮説的支援モデル」、「仕事と育児・介護のダブルケア中の仮説的支援モデル」、「ストレングスを発揮して人と社会に働きかける仮説的支援モデル」の3プロセスに分け、ストレングスを発揮して社会に働きかけるところまでを含めた「育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデル」を提示した。先行研究では、ダブルケアの困難さやポジティブな側面について明らかになっていたが、本研究によりそれらがどのように生じ、どのように対処して乗り越え、その後に当事者にとってその経験がどのような意味をもたらしてストレングスを獲得したのかが明らかになった。

キーワード：育児と介護、ダブルケア、働く母親、ワーク・ファミリー・コンフリクト

Keywords: Child Care and Nursing Care, Sandwich generation, Work-Family conflict, Working mother

## ▼英語抄録

The purpose of this research is to explore a hypothetical support model for Work-Family conflicts for women working during the sandwich generation of childcare and caregiving, where childcare and caregiving interact with each other. The focus was not only on the difficult aspects of work, childcare, and nursing care, but also on the good things that were gained through the experience. In Survey 1, semi-structured interviews were conducted with women who had worked during the sandwich generation of childcare and caregiving, and a process analysis was conducted with the aid of qualitative analysis and TEM (Trajectory Equifinality Approach) in order to determine how they viewed the parallel state of work and double care, what conflicts they experienced, and what interactions were at work to gain strength. In Survey 2, semi-structured interviews were conducted with municipal employees and a qualitative analysis was conducted to identify the support system and content in municipalities that provide pioneering double care support. From Surveys 1 and 2, we found out what happens depending on the work, childcare, and caregiving situation, what problems arise, how you deal with them, and whether you were able to deal with them successfully or not. The mechanism has been clarified. It also became clear that the situation differed depending on the period before work and double care started, during work and double care, and after life settled down. Reflecting these findings, I divided the process into three processes: "a hypothetical support model from a preventive perspective," "a hypothetical support model during double care for work and childcare/caregiving," and "a hypothetical support model that demonstrates strength and works with people and society," and presented a "hypothetical support model for Work-Family conflicts of women working during the sandwich generation of childcare and caregiving," including the process of demonstrating strength and working with society. Previous studies have clarified the difficulties and positive aspects of double care, but this study examined how it arises, how to cope with and overcome it, and what the experience means for those involved afterwards. The process by which they gained strength has become clear.

Keywords: Child Care and Nursing Care, Sandwich generation, Work-Family conflict, Working mother

## 【審査結果の要旨】

### 1 審査委員の構成と審査の経過

博士論文審査は、日本社会事業大学大学院学則、同学位規程及び同博士後期課程修了細則に基づき、第3次予備審査及び最終審査から成り立っている。審査委員は、社会福祉学研究科委員会にて選任された大学院担当の専任教員3名及び学外審査委員2名が担当した。5名の氏名と専門分野は以下のとおりである。

審査委員長	田村 真広	学校カリキュラムの歴史と理論、福祉教育論
審査委員	木村 容子	子ども家庭福祉、ソーシャルワーク実践モデル
審査委員	壬生 尚美	介護老人福祉施設のケア
学外審査委員	金子 恵美	家庭支援、地域支援ネットワーク、保育・養護
学外審査委員	藤岡 孝志	子ども家庭福祉、臨床心理学

2022年10月31日までに提出された第3次予備審査博士論文について、審査委員がそれぞれ精読し、11月26日の公開口述試験を行った。それらの審査を踏まえた各審査委員の指摘事項を審査委員長がとりまとめ、審査委員会は指摘事項に対応した論文の提出を受けて審査を行った。その結果、2023年7月13日の社会福祉学研究科委員会にて審査委員会から合格とする審査結果が提案され、了承を得た。本学学長は、これらの手続きを経て、2023年9月28日に「博士(社会福祉学)」の学位を与えることとした。

### 2 博士論文の評価

本論文は、仕事を持ち育児と介護のダブルケアに遭遇する女性に対して重要な示唆を与える研究成果である。子育てと介護が相互に影響しあい、育児と介護のダブルケア期に働く女性に対して、ワーク・ファミリー・コンフリクト理論を主軸とし、子育て支援の観点からストレングス理論を組み合わせた理論枠組みを定立し、実際に仕事とダブルケアに遭遇している12事例を丁寧に分析した結果をふまえて、包括的な仮說的支援モデルを提示することができた。

働きながら育児と介護のダブルケアを担う際の課題や困難さについて、ネガティブな相互作用だけではなく、その経験を通して得たポジティブな相互作用に焦点を当てた。家庭領域・地域社会・制度・支援・サービス・仕事領域・組織の就労制度において相互作用が働き、ストレングスを発揮して調整／対処を変動的かつ循環的に繰り返して乗り越えることで得られた8つの知見を組み込んで、「予防的な観点からの仮說的支援モデル」「仕事と子育て介護のダブルケア中の仮說的支援モデル」「ストレングスを発揮して人と社会に働きかける仮說的支援モデル」の3プロセスを支援モデルとして提示できた点は、社会的意義のある研究成果とみなせる。

調査1では、仕事とダブルケアを経験し、あるいは継続している12事例をネガティブな相互作用だけではなく、その経験を通して得たポジティブな相互作用に焦点をあて丁寧にプロセス分析し、新たに得られた8つの知見を提示した。調査2では、先駆的なダブルケア支援の取り組みをしている2

つの自治体にインタビュー調査し、調査対象は限られていたものの今後の探究への扉を開いた。

とりわけ、TEMを援用した独自の方法によって詳細な解析を行い、実証性を高めたうえで考察を深めた点には粘り強い努力の跡が認められる。また、ストレングス理論を精査して論理構成の礎を固めたことによって、独創性の高い仮説的支援モデルを提示することができた点は高く評価できる。

本研究のオリジナリティは、育児や介護、仕事の状況の変化に伴い、当事者がそれらにどのように対処、適応していくかに着目し、当事者の語りに基づいてそのプロセスをリアルにとらえようとした点にある。当事者らが自ら直面する状況をどのようにとらえ、乗り越えたか、あるいはうまく対応できなかったのかを解明し、当事者と当事者を取り巻く環境との間でどのような関係性が構築され、相互に作用しうるのかを見出したことにより、説得力のある仮説的支援モデルを提示できた。

総合考察では、研究を通じて得られた知見を明快に論じ、プロセスを3つに区分してそれぞれの段階の支援モデルを提示した。各支援モデルは、ワーク・ファミリー・コンフリクト理論とストレングス理論に基づく理論枠組みを使って、ミクロレベルの家庭領域、メゾレベルの仕事領域と地域社会、マクロレベルの制度等にわたる検討が踏まえられている。

ダブルケア期に働く女性の生活に何が起こるか、そのためにどのように対処していくかを予測し、具体的な支援策を講じることを可能とし、人々が人生をより豊かに生きていくことに貢献しうる点で、学術的にも社会的にも意義ある研究成果である。

自ら指摘した限界と課題を今後とも誠実に追究し、ダブルケア期に働く女性、ひいては社会が、困難を乗り越えつついつそう豊かになっていくよう貢献していただきたい。

### 3 最終試験の評価

新たな理論的枠組みを構築し、子育てと介護が相互に影響しあう、育児と介護のダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルを丹念に探索した。ダブルケアを担う際の困難さのみならず、経験を通して得たポジティブな側面にも焦点を当てて、調整・対処を経て乗り越えるプロセスを明らかにした。2つの調査の解析から得た知見をもとに、ダブルケア期に働く女性のワーク・ファミリー・コンフリクトに対する仮説的支援モデルとして、1. 予防的な観点からの仮説的支援モデル、2. 仕事と育児・介護のダブルケア中の仮説的支援モデル、3. ストレングスを発揮して人と社会に働きかける仮説的支援モデルを提示するに至った。本論文は、オリジナリティに富み、今後の課題が明示された、画期的な研究成果と評することができる。

社会福祉学の豊かな学識に裏付けられ、研究課題を科学的に追求し、社会福祉実践の向上や発展に資することのできる高度な実践的研究能力を示している。審査委員5名の全員一致で博士号授与に相応しいと判断した。